

# 研究通信

No.12

―大会特集―

|             |                       |                                 |                  |                  |
|-------------|-----------------------|---------------------------------|------------------|------------------|
| 会<br>部<br>内 | 研<br>究<br>部           | 社<br>会<br>学                     | 落<br>社<br>会      | 村<br>落<br>学      |
| 部<br>室      | 本<br>部<br>文<br>学<br>部 | 東<br>京<br>大<br>学<br>研<br>究<br>所 | 東<br>京<br>大<br>学 | 東<br>京<br>大<br>学 |
|             |                       |                                 |                  |                  |

## 第二回大会を

前にして

有賀吉左工門

昨年の創立第一回大会は初めての大会として成功であったのを思い出して、今年にはより以上充実したものにしたというものが我々の何よりの熱望である。そして村研を一步一歩確かなものにしたというものが我々の本音である。

今年も昨年より進歩したであろうか。我々は自分自身をかえりみて、この大会に出席したい。我々一人々々がすべてこの感じを持つなら、村研は一步一歩進歩するであろう。我々の会は、研究をたのしみ、研究をたのしむ者がお互いの研究の進歩に喜び合う会である。友達の成長に驚き、それを讃嘆し、それを喜び合いたいのである。研究の進歩には真実の究明があり、それによって我々の生活への掘り下げが深くなる事は

我々の最上の望であるからだ。

終戦以後我々は日本のみじめさ、力なさを余り多く望せつけられて来て、果ては自嘲し、落胆した。科学的究明の過程においても、このような事は多く現われはした。真実の究明とは果してたゞ露悪的な真実の追求なのであつたらうか。

我々は我々又は日本の多くの仄暗に身を切られるような切なさを感じる。科学のメ

スを切りつければこの切り口からも苦血が出る。そして物が云えなくなりそうだ。しかし切り刻んで、敢て立言し、真実を究明しなければならぬ。我々は日本の命をいとおしむが故に敢てしたい。我々は根がらの日本人であるが故に我々自身をあわれみ、愛する。そして科学の最上で最後に残る命を確認したい。そういう気持ちから我々の研究を尊敬し、成長させたいのだ。